みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：トランスナショナル・フローとローカリティの組み換え的創造：構築される移民空間のローカリティとストリート性：チャイナタウンからグローバル・シティへ—パプアニューギニア華人にとってのストリート経験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001213

関根康正編『ストリートの人類学』下巻
国立民族学博物館調査報告　81 : 303–325 (2009)

チャイナタウンからグローバル・シティへ
パプアニューギニア華人にとってのストリート経験

市川　哲
国立民族学博物館

移民はトランスナショナリズムの典型例であるとされがちである。だが移民は人生の全ての時間を移動に費やしているわけではない。日常生活のほとんどの時間は特定の国家や地域の中で営まれている。移民の生活世界を理解する際にも，日常的な居住地がもつローカリティを無視することはできない。以上の問題意識に基づき，本稿はパプアニューギニア華人の移住の特徴について考察する。ニューギニアには19世紀から華人が流入してきた。初期の華人はニューブリテン島の都市ラバウルにコミュニティを形成した。1960年代以降，華人の中にはニューギニア島南岸の都市ポートモレスビーに移り住む者があらわれるようになり，さらに1970年代からはオーストラリアに再移住する者が増加した。このようなパプアニューギニア華人の移住経験の特徴を把握するために，本稿では彼ら彼女らが連続的な移住の過程で暮らしたそれぞれの都市のストリートに注目した。それにより，トランスナショナルな存在であるとされがちである華人の経験を，個別地域のローカルな背景の中で理解することを試みた。

1　はじめに――ストリートとローカリティ
2　パプアニューギニアの華人社会
3　ラバウル――メラネシアの植民都市
4　ポートモレスビー――パプアニューギニアの首都
5　シドニー――マルチ・エスニックなグローバル・シティ
6　考察――移住経験とストリート経験

キーワード：華人，パプアニューギニア，オーストラリア，都市，チャイナタウン，グローバルシティ，連続的な移住

1　はじめに――ストリートとローカリティ

人の国際移動はトランスナショナルな現象の典型的な事例として，しばしば言及される傾向がある。トランスナショナリズムを視野に入れた文化人類学的な研究の多くは，限定的な地理的領域を超えた人々や資金，商品，観念，メディア等のフローを分析・考察の対象とするが，こうした研究姿勢は，ディアスポラと呼ばれるような，もともとの居住地を離れ，地理的に拡散して居住する人々を対象とする際に特に顕著になる（Ong 1999: 110–136; コーエン 2001: 252）。

だがこのような，いわばフローに注目し，トランスナショナルなレベルで活動する人々の生活を把握する場合，フィールドワークによる個別地域のミクロな脈絡を重視する文化人類学的研究は，いくつかの困難を抱え込むこととなる（Lewellen 2002; Brettell

2003)。トランスナショナルな研究は，文字通り，国家や国境を超えたレベルの現象を視野に入れるため，必然的にマクロな背景を分析や記述の対象とせざるを得ない。特に人の国際移動のように，ある国家から別の国家へと生活の場を移す現象を扱う場合には，分析のレベルは文字通り，トランスナショナルなものとならざるを得ず，文化人類学的なフィールドワークがなされる，対面的なコミュニティを超えた範囲を視野に入れなければならない。このようにトランスナショナルなレベルの記述では，国家を超えた様々な事物のフローに注目する必要があるが，国家を超えたレベルでの人間や事物のフローにまつわる現象を文化人類学的な手法や問題意識により把握するためには，フィールドワークに立脚するミクロな調査とともに，いかにして社会的・空間的な広がりを自己の研究の視野に入れるのかが問題となる[1)]。

移民はトランスナショナリズムを代表する現象であるとされがちであるが，現実には移民がその人生の全ての時間を移動に費やしているわけではない。移民の日常生活のほとんどの時間は，具体的な国家や地域の中で営まれているのであり，個々の移民にとっての日常的な居住地がもつローカリティを無視することはできない。トランスナショナルな活動が注目されがちな移民は，日常的な生活に根差すローカリティから自由な存在ではないのである。

また，移動するにせよ定住するにせよ，移民の日常生活は，それぞれの移民を取り巻く社会空間における身体的な経験に基づいていることも無視できない。グローバル化が進行し，トランスナショナリズムが常態となった現在でも，個別の居住地における身体的な経験を離れたところで生活する人々は存在しない。トランスナショナルな社会空間における，個々の移民の生活を文化人類学的に把握する際には，当事者の個別の身体的な経験を無視し議論を進めることは困難である[2)]。移民を対象とすることにより，トランスナショナリズムを理解する文化人類学的な研究も，個別の移民コミュニティのローカルなレベルでの経験を無視することは不可能である。

以上のような問題意識により，本稿はパプアニューギニア華人の移住と定住を事例として選択する。そしてパプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間における生活の特徴を，彼ら彼女らが，その居住地の「ストリート」でどのような経験を経ているのかを通して把握することを試みる。パプアニューギニア華人のトランスナショナルな移住と定住の特徴を考察するにあたり，そのストリート経験に注目することはそれなりの理由がある。本論に入る前に，その理由について簡単に触れておきたい。本稿では「ストリート」という概念を，道路や移動の経路という物質的・物理的な意味と同時に，異質な人々や事物，現象が日々流動し交流するという状況及びそこにおける経験も意味することとする。このようなストリートも，現代世界のトランスナショナリズムの進行から様々な影響を受けている。個別の地域に物質的および社会的に存在するストリートは，それぞれのローカルな特徴を持ちながらも，トランスナショナルなレベルで

の人間や事物等のフローとリンクしつつ，その性格を獲得しているのである。いわば，トランスナショナリズムがそれぞれの地域で異なる様相を呈することが明らかであるのと同様，それぞれの地域におけるストリート経験も異なることとなる。そのため，ある地域から別の地域へと生活の場を移す移民にとっても，それぞれの居住地におけるストリート経験には地域差が存在する。このことは，複数の地域で移動と定住を経た移民のストリート経験を検討する際により明らかになる。いわば，それぞれの移民の生活の中で，それぞれのストリートは，それぞれ独自のローカリティをまとい，移民の前に立ち現れるのである[3]。

本稿の以下の部分で後述するように，パプアニューギニアの華人は数世代にわたり，中国からパプアニューギニアを経てオーストラリアへと移住していったという経験を持つ人々である。このような，複数の地域で移住と定住を繰り返す過程の中では，それぞれの居住地ごとに特徴をもったストリートを経験することとなる。このような点に注目することにより，本稿はパプアニューギニア華人がそれぞれの地域でどのようなストリート経験を得てきたのか，そして，それぞれの地域のストリートが持つローカリティが，華人にとってどのような意味を持っているのかについて見てゆくこととしたい。

2 パプアニューギニアの華人社会

「パプアニューギニアの華人社会」について語り，記述することにはある困難が伴う。それは，「パプアニューギニア国内にいる華人」（Chinese in Papua New Guinea）だけを，「パプアニューギニアの華人」（Chinese of Papua New Guinea）として見なすわけには行かないからである。

現在のパプアニューギニアにどのぐらいの人口の華人が居住しているのかに関する正確な統計は存在しない[4]。人口統計を作成する上でパプアニューギニアに居住する華人の人口を把握する作業が困難な理由はいくつかある。もっとも大きな理由は，パプアニューギニアで生活し，経済活動を行っていながらも，頻繁に出身国への帰国や第三国を訪問し，またパプアニューギニアに入国する者が数多く存在することである。またこれとは逆に，パプアニューギニアで生活し，ビジネス活動を行っていながらも，必ずしも法的に正式な立場で居住しているわけではない華人も存在する。いわゆるビザやパスポートを持たない不法入国者も存在するが，そうした非合法な方法で入国し滞在する者以外にも，観光ビザ等で一時的に入国する者や，企業家の家族としての立場で流入する者の中にも，出身地とパプアニューギニアを頻繁に往復しながら非公式にビジネス活動を行う人々が存在する。このような状況はパプアニューギニア国内に「定住」している華人の人口を把握することを困難にする。これは別の言い方をすれば，定住者と一時滞在者との区別が曖昧な状況が多々見られるのである。

さらに現在のパプアニューギニアの華人社会の把握を困難にさせているのが，複数の地域出身の，多様な背景をもった人々の存在である。現在のパプアニューギニアの華人は中国大陸出身者のみではなく，マレーシア，シンガポール，インドネシアといった東南アジア諸国や，台湾，香港といった東アジアの諸国の出身者から構成されている（Inglis 1997; 市川 2003）。さらに中国出身者も単一の地域出身者のみが存在しているのではない。北京や上海，広東といった様々な地域の出身者が存在する。近年のパプアニューギニアにおける中国大陸出身者の中で特に目を引くのが，福建省の出身者である。福建省は代表的な僑郷[5]であり，パプアニューギニアに限らず，東南アジアにも数多くの移民を送り出してきた。だが実はニューギニア島がドイツやオーストラリアの植民地だった19世紀には，ほとんどの華人の広東省の出身者だった。これに対し，2000年代以降，パプアニューギニアに流入する中国大陸出身者の大部分が福建省を出身としている。さらにこれらの中国人ニューカマーは，福建省の中の福清地域という特定の地域出身者がほとんどであり，加えて特定の姓の者が目立つという特徴がある。典型的な地縁と血縁に基づく連鎖移民が存在し，パプアニューギニアの都市部における商業に従事しているのである。

このような，地縁や血縁に依拠した連鎖移民がなされるという現状は，単純に華人ディアスポラのネットワークがトランスナショナルなレベルで拡大している，と表現することはできない状態にある。上述した福清地域出身者に見られる地縁に基づく紐帯の存在とは，逆にいえば，同じ地縁関係を共有しない者を排除する性格を持っているからである。実際，2000年代になって急増した福清地域出身者に対して，他地域出身の華人が親密な関係を持ち，共同した社会活動を行っているわけではない[6]。もちろん，別々の地域出身の華人たちが相互に反目し合っているわけではないし，完全に分離し接触しないわけではないが，だからといって，無条件に相互に共通したアイデンティティを共有し，相互に合同した社会活動を行っているわけでもない。現在のパプアニューギニアの華人社会では，これら個々の華人は，共通するネットワークを無制限に広げているというよりも，個人的な交友関係や具体的なビジネス関係等を通して他地域出身者との間のネットワークを広げているのである[7]。

このように，「パプアニューギニアの華人」も，その内実は出身地域や使用言語，パプアニューギニアに流入してきた背景が異なる。そのため，「パプアニューギニアの華人」について語る場合も，それがどのような華人なのか，を常に明らかにする必要がある。現在のパプアニューギニアの華人の生活の領域はトランスナショナルなレベルで広がっているが，だからといって，全く均質的な性格を持つ単一のディアスポラの集団なのではない。むしろ，それぞれに異なる地域的背景をもった，複数のディアスポラの集まりなのだとみなすのが実情に合っている。

本稿の以下の部分では，パプアニューギニアの華人の中でも，特にニューギニア島が

植民地だった時代からこの地に居住してきた華人およびその子孫を事例として選択する。後述するように，パプアニューギニアにおける華人オールドカマーは，ドイツやオーストラリアによってニューギニア島が植民地化された時期に移住してコミュニティを形成したが，パプアニューギニア独立以後，再びオーストラリアに移住するという，連続的な移住をしている。このような，いわば数世代にわたるトランスナショナル[8]な経験を持つ華人オールドカマーにとって，パプアニューギニアやオーストラリアのストリートがどのような意味を持っているのかを考察するのは，トランスナショナルな社会空間の中におけるストリートが持つローカルな特徴を考察する上での好例になると思われる。

こうした，植民地期から存在する華人オールドカマーの移住経験とストリート経験について論じるに当たり，ここでこれらの人々をどのように呼ぶのかについて簡単に触れておきたい。「華人オールドカマー」という言葉は当事者たちは使用しない。当事者たちは，自称として広東語では「唐人」という語を用い，英語では Niugini Chinese や PNG Chinese という表現を使用する[9]。一般的な会話で一番良く用いられる自称は Niugini Chinese であるが，本稿では用語法の混乱を避けるため，植民地期から居住する華人およびその子孫を指す語として，単に「パプアニューギニア華人」という語を暫定的に用いることとする。

3　ラバウル――メラネシアの植民都市

パプアニューギニアの華人にとってのストリート経験について見てゆくにあたり，まずパプアニューギニアの都市，ラバウルを取り上げてみたい。ラバウルはかつて，パプアニューギニアにおける最大の華人コミュニティが存在し，現在でもパプアニューギニアやオーストラリア各地に居住する華人たちにとって，故郷として認識されている。

パプアニューギニアに限らず，メラネシアの在地社会は都市を形成しなかった。現在，パプアニューギニアに存在する都市のほとんどは，植民地化の過程でドイツ人やオーストラリア人が建設した，いわゆる植民都市である（熊谷・塩田 2000）。これはラバウルにも当てはまる。

ラバウルはニューギニアの北東部に位置する，ニューブリテン島の北端の都市である。現在のパプアニューギニアは，1884 年にドイツとイギリスが領有を宣言した地域に相当する。ドイツはニューギニア島の北東部とその周辺の島々を自国の植民地とし，コプラやタバコのプランテーションを開発した。当初，ドイツはニューギニア本島の開発に力を入れていたが，のちにはニューブリテン島やニューアイルランド島のプランテーション経営が盛んになった。それに従い，ニューブリテン島にはココポ，ニューアイルランド島にはナマタナイやケビエンといった都市が建設された。こうした中，ドイ

ツ領ニューギニアの首都として1910年に建設されたのがラバウルである。

ニューギニア島への華人の流入は，ドイツ領植民地の労働力として華人が導入されたことに端を発する。初期の華人はニューギニア本島やニューブリテン島やニューアイルランド島に到来し，主にプランテーション労働や大工，機械工として働いていた。ドイツ領ニューギニアの華人は，初期には数年の契約労働者が中心を占めており，契約期間が過ぎると帰国してしまったため，定着的な華人コミュニティは形成されなかった。だが20世紀になり，自由移民が増加すると次第にニューギニアに定住し，現地住民の女性と結婚する者や，中国から家族を呼び寄せる者が増加するようになった。

ドイツ領ニューギニアは1914年以降，オーストラリアの統治下に入ることとなる。第1次世界大戦の勃発とともに，ドイツ領ニューギニアはオーストラリア軍の軍政下におかれることとなった。さらに1920年からは国際連盟の委任統治領として正式にオーストラリアの統治を受けることとなった。これにより，ドイツ領植民地に形成された華人コミュニティも様々な分野で変容を遂げることとなった。オーストラリアは白豪主義政策を自国の植民地にも適用したため，華人は中国からの家族や知人の呼び寄せを制限されることとなった。また，1942年から1945年にかけて，ニューギニアの一部は太平洋戦争に伴い，日本軍の占領下におかれることとなった。太平洋戦争中，オーストラリア政府はニューギニア在住の華人を保護の対象としなかったため，日本軍政下で華人は日本軍による強制労働や強制キャンプでの生活を強いられることとなった[10)]。

日本軍の降伏により太平洋戦争も終わり，ニューギニアの華人は再びオーストラリアの統治下に戻った。戦争中，オーストラリア国籍を所有しなかったため，宗主国からの保護を受けられなかった華人は，戦後，オーストラリア国籍の取得を求めるようになる[11)]。オーストラリア政府は1950年代後半からニューギニアに在住する華人がオーストラリア国籍の取得を認めるようになった（Wolfers 1975: 133）。これを受け，1960年代までにはニューギニアに在住する華人のほとんどがオーストラリア国籍を取得するにいたった。

このような宗主国による各種の制限や人種差別的対応，ニューギニアをめぐる国際政治の動向を経験することもあったが，ニューギニアの華人はオーストラリアの統治により様々な影響を受け，生活様式を変容させることとなった。本稿ではその中でも特に以下の2点に注目することとしたい。第1点目はキリスト教の信仰であり，第2点目は英語およびピジン[12)]の使用である。

第1点目のキリスト教の信仰は，ニューギニアにおける外部世界からの顕著な影響の1つである。ニューギニア島はドイツやオーストラリアによって植民地化される以前から，ヨーロッパや北米，オーストラリア各地から伝道団が到来し，キリスト教布教活動が行われてきた[13)]。ラバウルでもキリスト教の教会や伝道団によって運営される小学校が存在した。華人もラバウルで生活し現地で世代を重ねることにより，次第にキリスト

教化していった。パプアニューギニアが独立するまでにはほぼすべての華人がキリスト教徒になり，日常生活のあらゆる部分で大きな影響力を持つようになった。パプアニューギニアは90%以上の人々がキリスト教を信仰しており，「クリスチャン・カントリー」と自称している。ラバウル周辺に居住するトーライ人も現在ではほぼすべてがキリスト教徒である。華人は在留オーストラリア人や在地のメラネシア人とも，キリスト教を通して交流し，同じクリスチャンであるという宗教的なアイデンティティを共有するようになった。

キリスト教の信仰は，華人コミュニティ内部の活動も特徴づけることとなった。日曜日ごとに開かれる教会でのミサの参加やクリスマス等の行事は，華人が定期的に集まり，相互に交流する機会を提供した。また後述するように，キリスト教への入信は，他の地域の華人とニューギニアの華人との差異に言及する際の参照点にもなった。

第2点目は植民地での生活による複数の言語の習得状況と言い換えることが可能である。だがこの複数の言語とは，宗主国の言語語である英語と，在地社会の共通語であるピジンの両方を習得するというところに特徴がある[14]。第2次世界大戦以前，ニューギニアの華人の中には，子供を中国や香港に送り，高等教育を受けさせる者が存在した。だがニューギニアにおける初等教育は，主にキリスト教伝道団の学校でなされていた。これらの学校では英語で教育がなされていた。また第2次世界大戦以降は，中国に戻り教育を受けることが困難になったが[15]，ニューギニアの華人たちは中国に子供を送る代わりに，オーストラリアの高等学校に子供を送るようになっていった。第2次世界大戦以降，英語教育を受け，オーストラリアでの生活を経験する世代が増えることにより，ニューギニアの華人の中には次第に英語話者が増加するようになり，華人コミュニティ内部の共通語としても英語が使用されるようになっていった。

またラバウルやその他の地域では，華人は華人コミュニティの内部のみで経済活動を行っていたのではなく，商売上の主要な顧客は現地住民であった。そのため，ニューギニアの在地社会の共通語であるピジンを日常生活の中で習得していった。また華人の両親の中には現地住民の女性を家事労働者として雇い，子供の面倒を見させる者が多かった。そのため華人は幼少期から現地住民に育てられ，ピジンに慣れ親しむことになっていった[16]。このような状況の下，華人たちはラバウル市街地内部のチャイナタウンに居住しながらも，宗教や商業活動，通婚等を通して在地のメラネシア人社会と密接な関係を維持するようになったのである。

上述したような社会的・文化的な変容を遂げながらも，ドイツおよびオーストラリアによる統治下で，華人はラバウルの特定の地域に集住し，チャイナタウンを形成して生活していた。またオーストラリア統治下では，華人はラバウルをはじめとするニューギニア島北東部にのみ居住することを許され，ニューギニア島の他の地域に移住することができなかった。1950年代後半以降，オーストラリア国籍の取得以降，華人はラバウ

ルのチャイナタウンを離れ，ニューギニアやパプアの異なる地域に居住することが可能になった。だが依然として，ラバウルにおける主要な経済活動や社会活動はチャイナタウン内部でなされていた。ラバウルの華人コミュニティは，チャイナタウンという地理的な区画を中心として社会活動を行っていたのである。

後述するように，現在，パプアニューギニア華人の大多数はラバウルを離れ，ポートモレスビーやオーストラリアに居住しているが，それらの華人の多くが，現在でもラバウルを自己の故郷として認識している。ラバウルを離れた華人たちは，しばしば「ラバウルはパラダイス（広東語で天堂）だった」と述べる。ラバウルは治安もよく，かつては夜中に道路をひとりで歩いても大丈夫だった，新年にはラバウルの街路でライオンダンスが演じられ，父祖や自分たちもそれに参加し，現地のトーライ人たちもそれを見るのを楽しんだものだ，という華人による語りは，ラバウルにおけるストリート経験が，華人コミュニティだけでなく，他のエスニック・グループとの相互交渉の中で成立し，なおかつ懐古の念をともなって想起されることを如実に表している。「ラバウルはポートモレスビーやオーストラリアの都市と異なり，自動車で移動する必要もなく，通常はチャイナタウンの中を歩いて移動し，知り合いの華人を訪問し合ったものだ」と華人たちは述べる。またラバウルのチャイナタウン内部のストリートは，オーストラリア人やメラネシア人たちも往来し，華人の商店を利用していた。ラバウルのストリートにおける華人たちの日常生活は，まさに「自分の足」で歩くことで成り立っていたのである。

このように，パプアニューギニアの華人にとって，ラバウルのストリートとは，ドイツやオーストラリアといった植民地の宗主国の政策から直接間接の影響を受け，在地のメラネシア人社会と日常的な交流がなされる場であったと表現することが出来よう。第2次世界大戦以前には，オーストラリアによる白豪主義政策の導入により，華人はラバウル市街地の特定の地域にのみ居住することを許されたため，チャイナタウンでの生活が基本となっていた。だが宗教や言語，婚姻，経済活動等を通して，宗主国や在地社会との密接な関係は植民地期から現在に至るまで存在しつづけた。ニューギニア華人にとってのストリート経験とは，チャイナタウンの中を「自分の足」で歩くことにより，仲間の華人，およびメラネシア人やオーストラリア人と直接交流する場であり，またその場も外部社会や在地社会との交渉の中で形成されていたのである。

だが現在，ラバウルに居住する華人は減少の一途をたどっている。その理由として挙げられるのが，1975年にパプアニューギニアが独立することにより，オーストラリアへと再移住する華人が増加したからである。新興独立国におけるエスニック・マイノリティとしての自己の立場に不安を覚えた華人たちの多くは，すでに国籍を取得したオーストラリアに再移住することを選択した。実際にはパプアニューギニア独立以降，直接的に華人を対象とした迫害や暴動は生じなかった。だがパプアニューギニア独立以後，ラバウルを離れる華人は増加し続けた。

さらに1994年に，ラバウルに近接する2つの火山が噴火することにより，ラバウル市街地は壊滅的な被害を受けた。噴火による泥流と火山灰の堆積により，ラバウル南東部にあったチャイナタウンは完全に破壊され，事実上消滅した。これにより，独立後もラバウルに残って生活していた華人たちの多くもラバウルを離れ，ポートモレスビーやオーストラリアに移り住むことを選択せねばならならなかった。パプアニューギニア独立直前のラバウルにはおよそ3,000人の華人が居住していたとされる。だが正確な人口は不明であるが，2008年の段階で，ラバウルおよび周辺地域に居住する華人の人口は100～200人程度になった，と現地の華人たちは説明している[17)]。

次にラバウルの華人たちの再移住先の1つである，ポートモレスビーを取り上げてみたい。ポートモレスビーは現在のパプアニューギニアにおける最大の華人コミュニティが存在するが，さまざまな点でラバウルとは異なる歴史的・社会的背景を持つ都市である。そのためここではポートモレスビーにおけるパプアニューギニア華人のストリート経験について見てみることとする。

4 ポートモレスビー――パプアニューギニアの首都

ポートモレスビーは現在，約30万人が居住するパプアニューギニアの首都である。1973年，イギリス人のジョン・モレスビー船長が寄港し，その後，彼の父であるモレスビー総督の名にちなんで建設されたポートモレスビーは，オーストラリア領パプアの首都として，この地域の行政や経済の中心地であり続けた。

パプアニューギニアの首都であり，国内最大の都市であるにもかかわらず，ポートモレスビーに華人が居住するようになった時期は，ラバウルよりも遅れることとなった。前述のように，オーストラリア政府は自国の植民地であるオーストラリア領パプア[18)]，および国際連盟の委任統治領として領有することとなった旧ドイツ領ニューギニアにも白豪主義政策を適用し，「有色人種」の流入を制限した（Radi 1971: 74）。そのためラバウルに居住してきた華人はパプア地域に移住することが制限され，ポートモレスビーで生活することができなかった。またオーストラリアはドイツと異なり，パプア地域におけるプランテーション経営等の植民地経営を積極的に進めなかったため，華人が植民地労働力としてこの地に導入されることもなかった。第2次世界大戦以前のポートモレスビーは，仕立て業等に従事する，特別に許可された数人の華人が居住するだけの状態であった。

ポートモレスビーに本格的に華人が居住するようになったのは，1960年以降，華人がオーストラリア国籍を取得するようになってからである。オーストラリア国籍の取得を認められた華人の中には，ラバウルを離れ，ニューギニアおよびパプアの他の地域に移住し，新たなビジネスチャンスを求める者が生じるようになった。コーヒー・プラン

テーションの開発が進む，マウントハーゲンやゴロカといったハイランド地域の都市で経済活動を始める者も存在したが，オーストラリア植民地行政府があり，パプア地域の中心地であるポートモレスビーに移り住む者が比較的多かった。

トーライ人が住民の大半を占め，比較的早い時期から周辺地域のプランテーションの開発が進んだラバウルとは異なり，ポートモレスビーは，先住民であるモトゥ人の他に，パプアおよびニューギニア各地からメラネシア人が流入し居住していた。ラバウルからポートモレスビーに移り住んだ華人たちは，これらパプアおよびニューギニア各地出身のメラネシア人や在留オーストラリア人たちを対象として，主に小売業や卸売業を経営するようになった。また華人たちはラバウル出身者を中心として，キャセイ・クラブという親睦団体を設立して，スポーツや娯楽活動を通して定期的に相互に交流する機会を設けていた。またラバウルで行っていたライオンダンスはポートモレスビーでも行われた。新年にはポートモレスビーに点在する華人の商店を訪問してライオンダンスを演じ，爆竹を放って新年を祝っていたとのことである[19]。

だがポートモレスビーにおける華人の生活は，ラバウルと同様，1975年のパプアニューギニアの独立とともに多大な変化を被ることとなった。ポートモレスビーでも，独立直前からパプアニューギニアを離れ，オーストラリアへと移住する華人が増加したことは，ラバウルの状況と共通していた。だがラバウルと異なり，独立後のポートモレスビーの社会状況の顕著な変化として注目できるのが，急速な治安の悪化である。

都市部の治安の悪化はポートモレスビーに限らず，独立後のパプアニューギニア各地の都市部で深刻な問題となっている（Dinnen and Ley 2000）。植民地期は植民地政府による統治により，治安が維持されてきた。だが独立以後は植民地政府による強制力がなくなり，パプアニューギニア政府による治安維持が十分に行われない状態になった。また，特に首都であるポートモレスビーには経済機会を求め，パプアニューギニアの様々な地域から人々が流入する。だがそれだけの労働力を受け入れるだけの企業活動が発達していない状態では，恒常的に労働力が過剰になり，大量の失業者を都市内部に抱え込むこととなっている。前述のように，ポートモレスビー周辺地域にはもともとモトゥという先住民が居住してきた。だが独立以後，ポートモレスビー住民の大部分はパプアニューギニアの他地域出身者から構成されるようになった。これらの人々は出身地から遠く離れた都市で暮らすため，出身村落の親族集団と離れた生活を送らざるを得ず，自給自足的な生活を営むことや，村落の親族からの援助を受けることは不可能な状態におかれている。就業機会の少ないポートモレスビーに流入する人々の多くは，フォーマル・セクターの仕事に就くことが困難であり，インフォーマル・セクターに参入するか，さもなくば失業者になるしかない状態に置かれている。経済機会を求めてポートモレスビーに流入する人々は，現実には失業と貧困の中での生活を余儀なくされているのである。

このような都市部の失業者の中には犯罪に走る者も存在する。パプアニューギニアで

は，都市部で犯罪に従事する者たちはラスカル（rascal）と呼ばれ，深刻な社会問題となっている。ポートモレスビーも独立後から現在に至るまで，このラスカルによる殺人や傷害，暴行，強盗，器物破損に悩まされ続けている（Levantis 2000）。ラスカルは路上の通行人だけでなく，商店や住宅も襲撃のターゲットにする。深刻な治安の悪化により，独立以後のパプアニューギニアでは，夜間の移動は困難になった。また昼間でもラスカルによる犯罪が生じているため，移動には車を利用する必要がある。家屋や商店も高いフェンスと鉄条網を張り巡らせ，ガードマンによる警備により，ラスカルによる攻撃に備えている。このような治安の悪化は独立以降，年々悪化の一途をたどっており，ポートモレスビーの都市住民の生活を圧迫し続けている。

治安の悪化はポートモレスビーに居住する華人の生活にも多大な影響を与えることとなった。前述のように，都市部での商業活動は常にラスカルからの犯罪行為にさらされることとなるため，ポートモレスビーに移り住んだ華人も，自己の家屋や商店の警備に細心の注意を払い，白昼でも車で移動する生活を送っている。ラスカルによる犯行は華人のみをターゲットとしているわけではないし，反中国人感情が関係しているわけでもない。ラスカルによる治安の悪化は，ポートモレスビーのほぼすべての住民にとっての問題である。だが実際に銃や刃物で武装した強盗団に商店や家屋に押し入られた経験を持つ華人や，ラスカルによって殺傷された知人や親族を持つ華人にとっては，ポートモレスビーにおける生活は緊張を強いられるものとなっている。

このような，車での移動を前提とし，危険と隣り合わせのポートモレスビーでの生活は，ラバウルでの「自分の足」で移動することによる日常生活とは異なる様相を呈している。華人のストリート経験も，ラバウルでのそれとポートモレスビーでのそれとは同一ではない。ラバウルでは，華人は主にチャイナタウンの中で生活しつつも，現地住民やオーストラリア人と日常的に交流し続けた。そしてその交流も基本的に「自分の足」で歩くことにより成り立っていた。もちろん，ラバウルでも華人と非華人の民族集団との交流に障害や制限がまったくなかったわけではない。だがラバウルと比較し，ポートモレスビーでは華人は非華人の民族集団のみならず，自己のコミュニティの成員との交流ですら，「自分の足」で歩くことにより成り立たせることが極度に困難なのである。フェンスと鉄条網で囲まれた家屋で暮らし，ガードマンや番犬に守られ，鉄格子越しに商品や金銭のやり取りをするというのはポートモレスビーにおける，典型的な華人の暮らしである。このようなポートモレスビーにおける経済状況や社会的な治安の悪化といった環境は，華人にとってのストリート経験をチャイナタウン内部での直接的，対面的なものから，車での移動を前提とした空間的に拡散され制限されたものに変化させたのである。

このような状況の下，ラバウルにおける火山の噴火のような劇的な変化こそ存在しないものの，ポートモレスビーの華人たちの中にも，次第にオーストラリアへと再移住し

てゆく者が増加することとなった。前述のように，植民地期から居住してきたパプアニューギニア華人は，すでにオーストラリア国籍を取得し，オーストラリアでの教育経験を持つ者が大多数を占める。そのため，特にポートモレスビーでの経済活動を引退した世代は，オーストラリアの諸都市，特にシドニーとブリスベンに家屋を購入し，移り住むようになっている。また若い世代も，オーストラリアでの高等教育を終えても，パプアニューギニアに帰らず，オーストラリアにとどまり暮らし続ける者が一般的になっている。そのため，現在ではパプアニューギニア華人のコミュニティは，パプアニューギニアにおけるそれよりも，オーストラリアにおけるもののほうがはるかに大規模になっているのである。そのため，次にこうしたパプアニューギニア華人のオーストラリアへの再移住とコミュニティの特徴を考察するために，シドニーにおける彼ら彼女らのストリート経験を検討することとしたい。

5　シドニー——マルチ・エスニックなグローバル・シティ

オーストラリアにおける華人社会の中におけるパプアニューギニア華人のコミュニティは，いくつかの点で，他の地域出身の華人のコミュニティと異なる性格を持っている。これはニューギニアで生まれ育ったというローカルな背景に加え，ニューギニアに居住していた時から英語教育を受け，オーストラリアでの留学経験を持つ者が多いという，言語的な背景もある。

現在，人口約 2,000 万人のオーストラリアには，約 30 万人の華人が居住しているとされている。特にシドニーはオーストラリアの経済的な中心地であるばかりでなく，アジア太平洋地域における人や資金の移動の結節点となるグローバル・シティの 1 つであり，大規模な華人コミュニティも形成されている。第 2 次世界大戦後，白豪主義政策から多文化主義政策へと政策を大転換させたオーストラリアには，大都市部を中心にイギリス出身者以外の人々も流入するようになったが[20]，現在のオーストラリアに居住する華人もこのようなオーストラリアにおける国際的な人の移動の中に位置づけることが可能である。

オーストラリアにおける華人社会はいくつかのサブグループから構成されており，必ずしも均質的な存在ではない。オーストラリアにおける中国系住民は，19 世紀末から存在していた。初期には牧羊業従事者や金鉱労働者として流入してきたが，1901 年以降，「有色人種」の移住を制限する，いわゆる白豪主義政策がとられるようになると，オーストラリアに到来する中国人は激減する。このような状況が変化するのは，やはり第二次世界大戦後の白豪主義の放棄と多文化主義の選択，特に 1970 年代から始まる，アジアからの移民の積極的な受け入れの開始以降である。

第 2 次世界大戦後にオーストラリアへと流入する華人にはいくつかの地域の出身者が

存在する。戦後，比較的早い時期にオーストラリアに流入したのは，主に東南アジアからの華人の留学生であった。その後，1980年代にはインドシナ難民がオーストラリアに流入したが，その中にはインドシナ諸国の華人が多く含まれていた。さらに1990年代になると，台湾や香港，中華人民共和国から流入する者が増加することとなった。特に香港が中華人民共和国に返還された1997年前後には，自己の置かれる環境に不安感をもった多くの香港人がオーストラリアに流入し，不動産の購入や国籍の取得をするようになった。19世紀にオーストラリアに流入した華人は大部分が広東省出身者であるが，同様に広東語話者である香港出身者もオーストラリアにコミュニティを形成するようになったのである。シドニーやメルボルン，ブリスベンにはチャイナタウンが存在するが，このようにして流入した香港人はチャイナタウンで経済活動を行う以外にも，大都市郊外で生活するようになっていった。また現在では中華人民共和国からの留学生や起業家，専門家のオーストラリアへの流入が増加している。高学歴で専門的な知識・技術を持つ者は比較的，オーストラリアへの移住が容易であるため，オーストラリアで生活する中華人民共和国出身者にもそのような者が多いという特徴がある。また，オーストラリアの大学に留学する中華人民共和国出身の学生も年々増加し，卒業後は帰国せず，オーストラリアにとどまり生活する者も出てくるようになってきている。このように，現在のオーストラリアにおける華人社会は，それぞれの異なる移住要因や移住の背景を持つ，複数の地域出身の華人によって構成されているのである（Ho and Goughlan 1997; Wu 2003）。

パプアニューギニア華人のオーストラリアへの移住も，このような第2次世界大戦後のオーストラリアへの中国系移民の流入の流れの中に位置している。前述したように，第2次世界大戦以前のニューギニアに居住する華人は，オーストラリアへと移住することができなかった。だが1950年代後半以降，オーストラリア国籍を取得したニューギニアの華人たちは，オーストラリアで教育を受け，生活経験を持つことにより，次第に英語を自分たちのコミュニティの共通語の1つとするようになり，同時にオーストラリア的生活様式が浸透してゆくようになっていった。

1975年のパプアニューギニア独立，および独立以後の社会的な治安や経済状況の悪化，ラバウルに隣接する火山の噴火による華人コミュニティの壊滅的な被害等の要因により，パプアニューギニア華人は1970年代からオーストラリアの都市部に家屋や土地を購入し，パプアニューギニアの資産を売却して移り住むようになったのである。前述のように，インドシナ諸国出身者をはじめとする東南アジア華人や香港人，中華人民共和国出身者がオーストラリアに流入しはじめるのは1980年代以降であり，それが本格化するのは1990年代以降になってからである[21]。これに対し，1970年代からすでにオーストラリアに移り住み，なおかつ移住以前から英語やオーストラリア的な生活様式をすでに身につけていたパプアニューギニア華人は，その他の地域出身の新来の華人とは

様々な部分で異なっていた。

すでにニューギニアに居住していた時から英語に慣れ親しみ，自分たちのコミュニティの共通語の１つとしてきたパプアニューギニアの華人にとって，オーストラリアでの生活は，言語の点では何の問題もなかった。また，英語教育を受けた世代は漢字の読み書きがほとんどできず，中国語も広東語の四邑方言を話し，中国や台湾で現在使用されている標準中国語（普通話）を理解できない。そのため，チャイニーズとしてオーストラリア内部のエスニック・マイノリティとして暮らす一方で，新来の華人とは使用する言語の違いにより，相互のコミュニケーションは常に容易であるとは限らないという状態にある。

またパプアニューギニア出身の華人は，シドニー北部の住宅地に居住する傾向がある。シドニーはシドニー湾を挟み，都市が大きく北岸と南岸に分かれている。チャイナタウンと呼ばれる，いわゆる華人の商店や企業が集中している地域は南岸に存在する。これに対し，パプアニューギニア華人の多くは北岸の住宅地に居住する者が多い。シドニーの北岸は，比較的新しく開発された地域であり，「高級住宅地」というイメージがある。パプアニューギニア華人にとって，南岸のチャイナタウンは，自己の生活の中で中心的な場所を占めているわけではなく，郊外の住宅地での非華人系住民の間での生活が一般的になっている。このような大都市の郊外の住宅地に居住するのは華人だけではない。圧倒的に大多数の居住者はヨーロッパ系のオーストラリア人であり，パプアニューギニア華人はこのようなオーストラリア人の中で生活している。このような郊外の住宅地に居住するのはシドニーに限らず，オーストラリアの他の都市，例えばブリスベンに居住するパプアニューギニア華人にも共通してみられる傾向である。

またほぼ全ての者がキリスト教を信仰するパプアニューギニア華人は，他地域出身の華人による仏教や道教，民間信仰の組織や活動に参加することはない。現在のオーストラリアには香港や台湾，東南アジア出身者，中華人民共和国出身者の中に仏教徒が存在し，仏教寺院も設立されている[22]。このような仏教団体はオーストラリアにおける華人系住民の社会活動の場にもなっている。だがほぼ全ての者がキリスト教徒であるパプアニューギニア華人は，このような他地域出身が形成する，仏教に代表される宗教団体とは基本的に無関係である。

オーストラリアに移住したパプアニューギニア人コミュニティにとっては，上述の他の華人によって形成される組織よりも，むしろ自分たちで設立した組織の方が重要性を持っている。その中でも代表的なものが，シドニー在住者によって形成された，PNG Chinese Catholic Association である。この組織は主にかつてラバウルに在住していたカトリックの信者たちが，ラバウルでの宗教活動と交友関係をシドニーでも維持するという目的の下に設立したものである。PNG Chinese Catholic Association はキリスト教団体ではあるが，宗教活動だけでなく，スポーツや旅行のような娯楽活動，親睦活動も開催して

いる。またニューズレターを定期的に発行し，オーストラリア各地，およびパプアニューギニアに居住しているメンバーに送付している。ニューズレターは英語で書かれ，各地に分散して居住するパプアニューギニア華人の出産や洗礼，結婚，死亡に関する記事が掲載される。こうしたニューズレターを購読し，あるいは記事を投稿することにより，パプアニューギニアとオーストラリアに拡散して居住する華人たちは，かつてのように対面的ではないが，相互に関係を維持しているのである。また PNG Chinese Catholic Association は毎月第１日曜日に教会でミサを，第１木曜日に会員の家で祈祷会を開催している。こうしたミサや祈祷会に参加することにより，シドニー各地に居住しているパプアニューギニア華人たちは定期的にお互いの関係を保つことが可能になっている。

パプアニューギニア出身者によるコミュニティが存在する一方で，特に若い世代は，オーストラリアで華人コミュニティ外部での生活の方が重要性を増してきている。パプアニューギニア独立以後，オーストラリアに移住してきた華人の中には，パプアニューギニアに持っていた土地や商店といった資産を売却し，移住後は特に仕事をせず，引退生活を送る者が多かった。だが，引退するにはまだ早い若年層は，オーストラリア移住後も企業や公的機関で，一般の労働者として働くこととなった。このような，オーストラリアで就職する人々は，華人のコミュニティで働くのではなく，一般のオーストラリア企業や公的機関で働くため，非華人と交流する時間の方が圧倒的に多くなっている。すでに英語を自分たちの共通語の１つとしており，オーストラリア的な生活様式に慣れ親しんでいたパプアニューギニア華人は，オーストラリアの生活は，必ずしもパプアニューギニアでの生活や，「中国文化」に引きずられることなく，オーストラリア社会の一員としての生活を営んでいるのである。

このような状況の下，シドニーにおけるパプアニューギニア華人のストリート経験は，ラバウルのチャイナタウン内部での生活と異なり，ポートモレスビーにおけるそれとも異なっている。シドニー郊外で他のオーストラリア人とともに暮らすパプアニューギニア華人は，ポートモレスビーと同様，「自分の足」で歩くことにより構築されるというよりも，むしろ車での移動を前提としたものである。だがオーストラリアでの生活はポートモレスビーとは異なり，他の非華人系住民，特に多数派であるオーストラリア人社会と密接な関係をとり結んでいるという特徴がある。ポートモレスビーにおける華人と非華人系住民との関係は，個人的な交友関係を除けば，ほぼ経済関係に限定されている。このことはポートモレスビー住民のマジョリティであるパプアニューギニア人との間で特に顕著である。治安の悪化するポートモレスビーでは，華人が他の民族集団と戸外で交流する機会はほとんど存在しない。だがオーストラリアでは，移動こそ車や公共交通機関を使用する必要があるが，パプアニューギニア華人はオーストラリア人社会から分離することはなく，経済関係以外にも，学校や企業，近隣関係や交友関係等を通

して密接に交流している。むしろ，英語を共通語として使用し，キリスト教を信仰し，必ずしも「中国的」な生活を志向するわけではないパプアニューギニア華人は，マジョリティであるオーストラリア社会から孤立してはおらず，密接な関係を構築しているのである。

オーストラリアにおけるパプアニューギニア華人の状況を顕著に表す表現として，「PNGBC」と「ABC」の２つがある。PNGBC とは Papua New Guinea Born Chinese の頭文字であり，ABC とは Australia Born Chinese の頭文字である。PNGBC とはパプアニューギニア華人の別称として使われることもあるが，現在，多くのパプアニューギニア華人がオーストラリアへと移住することにより，次第にオーストラリア生まれの世代が増加するようになっている。こうした，オーストラリアで生まれたパプアニューギニア華人の子供たちは，名実ともに ABC になってゆく。パプアニューギニア華人はパプアニューギニアで生まれ育ったという経験により，英語を話し，オーストラリア国籍を取得しながらも，キリスト教活動を中心とすることによりコミュニティを維持し，依然として相互に密接な関係を保っている。だがこのようなパプアニューギニア華人のコミュニティも，オーストラリア生まれの世代が増加することにより，徐々に変化しており，次第に華人社会よりも，オーストラリア社会との関係を深めてゆく傾向がある。

郊外の住宅地に居住し，英語を共通語の１つとして使用し，キリスト教を中心とした社会活動をするパプアニューギニア華人にとって，オーストラリアでの生活は，「オーストラリア人」の生活そのものであるということも可能である。シドニーに代表されるオーストラリアの都市部では，華人に限らず，イギリス系以外の移民が多数存在し，これらの多様な地域出身の人々との接触や交流は日常的になっている。郊外に点在するパプアニューギニア華人たちの家を，それぞれの華人が訪問する際には車で移動する必要があるが，学校や職場，商品の購入等の都市部での生活，さらには地域社会での活動では，パプアニューギニア華人とだけ交流するわけではない。むしろ非華人系オーストラリア住民との交流の方がより頻繁になっている。このような状況の下，パプアニューギニア華人が，たとえばシドニーの街中を歩く際には，必ずしも「華人」として歩くだけではない。パプアニューギニア華人の中にも，シドニーのチャイナタウンに行き，買い物や食事をしたり，文化活動に参加したりする者は存在する。だがそうしたチャイナタウンの訪問も，パプアニューギニア華人にとっては自己のコミュニティの訪問というよりも，気晴らしや，なかなか手に入らない食材の購入といった目的の方が強く，必ずしも他地域の華人との積極的な交流を求めているわけではないのである。

オーストラリアにおけるパプアニューギニア華人たちは，中国に自己の出自を持ち，ニューギニアで生まれ育ったという背景を持ちながらも，同時にオーストラリア社会の一員として，非華人系のオーストラリア住民たちと接触する生活を送っている。こうしたオーストラリア在住のパプアニューギニア華人のストリート経験も，ラバウルのよう

なチャイナタウンに依拠したものではなく，またポートモレスビーのように，ビジネスに特化したエスニック・マイノリティとしてのそれとも異なる，さまざまな民族集団が居住する，マルチ・エスニックな状態を持つ，グローバル・シティの住民の1人としての経験となるのである。

19世紀末から現在までの，中国からパプアニューギニアを経てオーストラリアに至る移住経験の中で，華人はそれぞれの居住地で異なる環境に置かれることとなった。華人のストリート経験も，それぞれの居住地の地域的・社会的な背景を受けることとなった。最後に，このようなパプアニューギニア華人の数世代にわたる連続的な移住の過程におけるストリート経験の特徴について考察してみたい。

6 考察——移住経験とストリート経験

パプアニューギニアとオーストラリアに分散して居住する，中国出身者の子孫たちであるパプアニューギニア華人は，典型的なトランスナショナルな存在であり，その生活はトランスナショナルな社会空間の中で営まれているといえよう。だがこれまで見てきたように，パプアニューギニア華人はラバウル，ポートモレスビー，シドニーといった，連続的な移動過程の中で生活したそれぞれの都市で，それぞれ異なった性格を持つストリートを経験してきたのである。本稿の冒頭でも検討したように，異質な存在が流動し交流し合うストリートは，さまざまな人間や事物のフローの場としての性格を持っているが，同時にそれぞれの地域のローカリティから離れて存在するわけではない。いわばトランスナショナルな経験は，逆説的にストリートのローカルな性格を明確化させるのである。

またこれは，それぞれのストリートでどのような経験を得るのかも，当事者によって異なることを意味する。現在，パプアニューギニアにもオーストラリアにも，パプアニューギニア華人以外の他地域出身の華人が居住しているが，これらの華人たちが，チャイナタウンや都市郊外で得る経験は，パプアニューギニア華人とは異なることとなる。またたとえばオーストラリアにおける同じストリートを「自分の足」によって歩いている際にも，英語を使用し，オーストラリア人的な生活様式に基づき歩く場合と，中国語を使用し，自己の出身地を志向しながら歩く場合とでは，おのずからその意味合いは異なることとなる。異質なものが流動するストリートでは，その異質さをどのように受け止めるかも，それぞれの当事者ごとに異なるのである。

このような状況下における華人のストリート経験に注目する作業は，中国に出自を持つ移民およびその子孫たちが，均質的な性格を持つ「華人ディアスポラ」として存在しているわけではないことも明らかにする。中国国外に居住する華人たちは，典型的なトランスナショナルな存在として言及され，場合によっては彼ら彼女らもそうした自己の

トランスナショナル性を強調する場合がある。だが「華人ディアスポラ」という単一の民族集団が存在するわけではないことは明らかである。実際にはそれぞれの地域ごとに異なる歴史的・文化的背景を持つ，複数の中国系住民が存在するだけであり，それが相互の文化や出自の共通性を意識し，自他をアイデンティファイしているというのが現状であるというべきだろう。アンは，華人ディアスポラという概念は，ハイブリッドな存在であることを喚起するよりも，むしろトランスナショナルなレベルでのエスニシティの均質性を強調してしまう恐れがあることを問題視する。たとえば彼女は，シドニーに居住するさまざまな地域出身の華人を，「華人」という単一のカテゴリーの中にすべて含めてしまうことには困難が伴うと述べる。このような問題意識により，彼女は，本質的なアイデンティティの共有をその前提としがちであるディアスポラという概念は，シドニーのような世界各地からの移民が居住するグローバル・シティのハイブリッド性の中では，その矛盾を明るみに出してしまうのだと主張する（アン 2004: 303）。アンの指摘を待つまでもなく，本稿で注目したパプアニューギア華人のような，連続的な移住により，複数の地域での生活経験を持つ人々にとっても，グローバル・シティの内部のみならず，それ以外の都市内部のストリートの中でも，「グローバルな規模で拡散しながらも，共通した特徴とアイデンティティを共有するディアスポラ」という前提は当てはまらないのである。

広東語の四邑方言を話し，英語を共通語として使用するため，標準中国語を基盤とする華人のネットワークに参入することができないパプアニューギニア華人は，華人ディアスポラの中の例外的な存在であり，周辺的な人々である，という批判が存在するかもしれない。だがこうした見方はむしろ，華人ディアスポラをトランスナショナルなレベルで共通するアイデンティティを保持する人々であるとして過度に本質化して捉えようとする認識がそうさせるのであり，ディアスポラの中に中心と周辺を設定し，中心から離れた人々を例外的な事例として排除する前提こそが，彼ら彼女らを周辺化させるのである。

それぞれの移住先のストリート経験を丹念に追えば，彼ら彼女らは，ローカルあるいはナショナルな制約を離れた自由なトランスナショナルな存在なのではなく，ローカルなものに引きずられながらも，トランスナショナルな領域で暮らしていることが明らかであろう。異質な存在が行き交う場であるストリートでの経験に注目することは，だからこそ，トランスナショナルな空間の中のストリートが持つローカリティの個別性を明確化させるのだといえよう。

注

1）このような，最終的に小規模コミュニティや個人の主体的選択に注目する研究手法と，最終

的に世界システムにまで拡大できるポリティカル・エコノミーを重視する研究手法との間にどのように折り合いをつけるかについては，ミクロとマクロの接合（石川 1993）やミクロとマクロの間に存在するメゾのレベルへの注目（Faist 2000: 16–17; Brettell and Hollifield 2000: 9）といった表現により，両者をともに視野に入れた研究の必要性が指摘されているが，そうした試みを具体的な民族誌を記述することにより提示している研究はまだ本格化していないように見受けられる。

2) トランスナショナルなレベルに限らず，ある個人やコミュニティを取り巻く社会空間は，個別の身体を通して存在するのであるということが可能である（西井 2006: 11; 内堀 2006: 92）。

3) 華人社会のストリートを対象とした先行研究の多くは，おもにチャイナタウンの景観や構成に注目するものや（山下 2000; 2002），チャイナタウン内部の華人の社会構造や宗教活動，経済活動等を扱うものが多かった（Luk 2001; Guest 2003）。このような先行研究は，地理学的な観点からのチャイナタウンの空間構成や，チャイナタウン内部の華人の社会活動を研究の対象としてきたが，華人の生活の場における身体的な経験に関する考察は少なかったということができる。これに対し本稿がとる方向性は，華人の個別の居住地における生活を，「ストリート」における経験を通して把握するものである。

4) 1970 年代初頭にパプアニューギニア華人を対象とした現地調査をしたウーは，パプアニューギニア独立直前のパプアニューギニア華人の人口はおよそ 3,000 人であると述べている（Wu 1982）。独立以後の華人の人口について，イングリス（Inglis 1997）はパプアニューギニアのセンサスを使用し，1995 年の時点で約 1,500 人と推計している。マーは 7,500 人としている（Ma 2003）。現在，首都ポートモレスビーに在住している筆者の友人のある華人は，現在のパプアニューギニアにはおよそ 10,000 人が存在しているであろうと述べる。本文でも説明したように，流動性が高く，国籍も多様な現在のパプアニューギニア在住の華人の正確な人口を推測することは困難である。そのため，ここでは現在のパプアニューギニア在住の華人を暫定的に 10,000 人程度とし，その中でも植民地期から居住してきた，「オールドカマー」であるパプアニューギニア華人の人口を約 3,000 人とすることとする。

5) 僑郷とは中国語で華僑の故郷の意味である。広東省や福建省，海南省は 19 世紀以降，特に東南アジアや南北アメリカ大陸に数多くの華僑を送り出してきた，典型的な僑郷である。

6) 一例をあげると，19 世紀から華人コミュニティが存在したラバウルにも，2000 年代以降，福清地域出身者が増加するようになっている。1980 年からラバウルに居住し，雑貨店を経営しているシンガポール出身のある華人は，自分の店舗の向かいの商店の経営者は福清地域出身者であるが，自分は彼らの言葉を知らないのでお互いに話をするのが困難であり，彼らがどのようにしてパプアニューギニアに来たのかも知らないし，普段，何をしているのかもよくわからない，と筆者に説明していた。シンガポール出身の彼は，標準中国語（普通話）を話すことができるため，中国で教育を受けた福清地域出身者と標準中国語を用いて会話することは可能であるが，それでも相互の生活空間が必ずしも一致していないため，密接した地理的空間内でお互いに生活し，同じエスニシティを共有しているにもかかわらず，相互の生活空間は驚くほど重なり合わないということが指摘できる。

7) この問題については，パプアニューギニア華人，マレーシア華人，中華人民共和国出身者という，3 つの国家出身の華人のライフヒストリーを検討することにより詳述したことがある（市川 2006）。

8) このようなパプアニューギニア華人の連続的な国際移動を，トランスナショナルな活動と表現することには留保が必要かもしれない。植民地期の華人にとって，中国からニューギニアへの移住は必ずしも政治学的な意味でのナショナルな存在を前提としていたわけではない

し，パプアニューギニア独立直前のオーストラリアへの再移住も，オーストラリア国籍を取得した華人が，植民地から宗主国へと住居を移しただけであり，ナショナルな領域を超えたわけではないからである。だが本稿では「トランスナショナル」という表現に内包される「ナショナル」という語を限定的に捉える立場をとらない。それにより，現代社会の顕著な特徴としてしばしば喧伝されるトランスナショナルな現象の歴史的な背景について考察することとしたい。

9) またこれとは別に，華人は現地住民からピジンにより，サイナ（*saina*）やコンコン（*kongkong*:「香港」が訛ったものといわれる）と呼ばれることがあるが，華人たちが自称としてこれらの言葉を使用することはない。

10) 太平洋戦争の開始とともに，日本軍がニューギニアに進行しつつあることが明らかになると，オーストラリア政府はニューギニアに居住している非戦闘民のオーストラリア人を自国に避難させた。しかし華人に対しては一貫した態度をとらなかった。ニューギニア本島に居住していた華人の中にはオーストラリアに避難した者も存在したが，ラバウルやケビエンといったビスマルク諸島に居住していた華人は保護の対象とせず，オーストラリアに避難させることもなかった。戦争中の経験について，日本兵による迫害以外にも，華人を保護しなかったという，このオーストラリア政府の態度を非難する高齢の華人は現在でも多い。なお，太平洋戦争中の日本軍政下のニューギニアの華人の生活については別稿で詳述したことがある（Ichikawa 2005）。

11) オーストラリア国籍取得以前，ニューギニアの華人は Australian Protected Parson という立場であり，法的にあいまいな立場に置かれていた。1971 年までニューギニアには国民党の支部が存在したが，ほとんどのニューギニアの華人は中華民国のパスポートを所有していなかった。

12) パプアニューギニアの共通語として使用される，いわゆるピジン・イングリッシュは，トク・ピシン（Tok Pisin）やメラネシア・ピジン，ネオ・メラネシアンと呼ばれるが，本稿では煩雑さを避けるため，「ピジン」とのみ表記することとする。

13) ニューギニアにおけるピジンは，植民地におけるメラネシア人のプランテーション労働者たちが，白人の統治者との間や労働者同士でのコミュニケーションをとる中で誕生したといわれているが，キリスト教の布教活動もその形成や拡散に寄与していた（豊田 2000）。

14) 実際には，ラバウル周辺の在地の住民はトーライ人であり，クアヌア語の話者である。だが華人はクアヌア語ではなく，ピジンを使用して現地の人々とコミュニケーションをとってきた。

15) 第二次世界大戦以後も中国大陸では国共内戦や共産党による中華人民共和国政府の樹立等の混乱が続き，オーストラリアも 1972 年まで中華人民共和国と正式な国交をとり結んでいなかったため，ニューギニア在住の華人が中国を訪れるのは困難であった。

16) このような言語状況を反映し，現在でもパプアニューギニアの華人の中には，幼少期には広東語や英語よりも，まずピジンを先に覚えて会話をはじめ，その後，年齢が上がるに従い，次第に広東語や英語を中心に話すようになった，と説明する者が存在する。

17) このように植民地期から居住してきた華人が減少する一方で，1990 年代以降，広東省以外の中華人民共和国の他の地域出身の中国人が流入するようになった。これらの華人ニューカマーは，植民地期から居住する華人がオーストラリアに移住することによって生じた経済的ニッチに参入するという形態をとっているが，本稿の目的は植民地期から居住する華人のストリート経験を検討することにあるため，この現象については本稿では詳述しないこととする。

18) ニューギニア島南東部は1884年，イギリスによって領有を宣言されたが，この地域は1905年よりオーストラリアが植民地として受け継ぎ，オーストラリア領パプアとなった。
19) ただし，ポートモレスビーにおけるライオンダンスは，1975年のパプアニューギニア独立以降は行われなくなった。ライオンダンスを止めてしまった理由として，パプアニューギニア政府が爆竹の使用を禁止したことや，ライオンダンスの演者たちが道路交通の障害になったため，次第にポートモレスビーの路上で演じることが困難になったからであるとの説明が当時を知る者たちからなされている。
20) オーストラリアへのアングロサクソン系以外の移民が増加したのは第2次世界大戦以後であり，1940年代から主に南欧や東欧出身者が流入するようになった。メルボルンやシドニーにギリシャ人やイタリア人のコミュニティが形成されるようになったのはこれを反映している。また1970年代以降はインドシナ難民を国内に受け入れるようになり，シドニー郊外のカブラマッタやパラマッタにベトナム人をはじめとするインドシナ出身者の集住地域が誕生するようになった。
21) 現在，シドニーの北部に居住する何人かのパプアニューギニア華人たちは，華人を含むアジア系住民がシドニーでコミュニティを形成し，目立つ存在となり始めるのは1990年代中頃になってからであり，それまではシドニー北部に居住するアジア系住民はパプアニューギニア華人や日本人の駐在員ぐらいであった，と筆者に語っていた。
22) このような華人コミュニティの中心としての役割を果たす代表的な仏教寺院としては，たとえば台湾に本部を置く，国際仏光会の支部がある。オーストラリアにおける仏光会は各地に寺院を設立し，在オーストラリアの台湾人仏教徒の社会活動の場を提供している。

文　献

アン，I.
2004 「ディアスポラを解体する――グローバル化時代のグローバルな華人性を問う」小沢自然訳，テッサ・モーリス＝スズキ・吉見俊哉編『グローバリゼーションの文化政治』pp. 274–308，東京：平凡社。

Brettell, C. B.
2000 Theorizing Migration in Anthropology: The Social Construction of Networks, Identities, Communities, and Globalscapes. In C. B. Brettell and J. F. Hollifield (eds.) *Migration Theory: Talking across Disciplines*, pp. 97–136. New York and London: Routledge.
2003 *Anthropology and Migration: Essays on Transnationalism, Ethnicity, and Identity*. Walnut Creek, Lanham, New York, Oxford: Altamira Press.

Brettell, C. B. and J. F. Hollifield
2000 Migration Theory: Talking across Disciplines. In C. B. Brettell and J. F. Hollifield (eds.) *Migration Theory: Talking across Disciplines*, pp. 1–26. New York and London: Routledge.

コーエン，R.
2001 『グローバル・ディアスポラ』駒井洋監訳，角谷多佳子訳，東京：明石書店。

Dinnen, S. and A. Ley (eds.)
2000 *Reflections on Violence in Melanesia*. Hawkins Press and Asia Pacific Press.

Faist, T.
2000 *The Volume and Dynamics of International Migration and Transnational Social Space*. Oxford: Clarendon Press.
Guest, K. J.
2003 *God in Chinatown: Religion and Survival in New York's Evolving Immigrant Community.* New York and London: New York University Press.
Ho Chooi Hon and J. E. Coughlan
1997 The Chinese in Australia: Immigrants from the People's Republic of China, Malaysia, Singapore, Taiwan, Hong Kong and Macau. In J. Coughlan and D. J. McNamara (eds.) *Asians in Australia: Patterns of Migration and Settlement*, pp. 120–170. Macmillan Education Australia.
市川　哲
2003 「パプアニューギニアにおける華人の移動とコミュニティの変遷過程」『アジア・アフリカ言語文化研究』65: 181–206。
2006 「ライフヒストリーを通してみた華人ネットワークの包摂性と排除性——パプアニューギニアをめぐる華人の国際移動を事例として」『文化人類学研究』7: 97–124。
Ichikawa, T.
2005 The Chinese Experience during the Japanese Occupation in New Guinea. *People and Culture in Oceania* 21: 1–18.
Inglis, C.
1997 The Chinese of Papua New Guinea: From Settlers to Sojourners. *Asia and Pacific Migration Journal* 6 (3/4): 317–341.
石川　登
1993 「農民と往復切符——循環労働移動とコミュニティ研究の最前線」『民族学研究』58(1): 53–72。
熊谷圭知・塩田光喜編
2000 『都市の誕生——太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容』東京：日本貿易振興会アジア経済研究所。
Levantis, T.
2000 Crime Catastrophe: Reviewing Papua New Guinea's Most Serious Social and Economic Problem. *Pacific Economic Bulletin* 15 (2): 130–142.
Lewellen, T. C.
2002 *The Anthropology of Globalization: Cultural Anthropology Enters the 21st century*. Westport, Connecticut and London: Bergin & Garvey.
Luk, C. M.
2001 Subethnicity and Identity: Socio-Cultural Interpretations of Chinese Business Titles in Toronto. *Asian and Pacific Migration Journal* 10 (1): 145–167.
Ma, Laurence J. C.
2003 Space, Place, and Transnationalism in the Chinese Diaspora. In Laurence J. C. Ma and C. Cartier (eds.) *The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility, and Identity*, pp. 1–51. Lanham, Boulder, New York & Oxford: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
西井涼子
2006 「社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治編『社

会空間の人類学――マテリアリティ・主体・モダニティ』pp. 1–31, 京都：世界思想社。
Ong, A.
1999 *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*. Durham, NC: Duke University Press.
Radi, H.
1971 New Guinea under Mandate 1921–1941. In W. J. Hudson (ed.) *Australia and Papua New Guinea*, pp. 74–137. Sydney: Sydney University Press.
豊田由貴夫
2000 「メラネシア・ピジンと植民地主義」吉岡政徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究』（国立民族学博物館研究報告別冊）21: 151–173。
内堀基光
2006 「社会空間としてのロングハウス――イバンの居住空間とその変化」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学――マテリアリティ・主体・モダニティ』pp. 92–115, 京都：世界思想社。
Wolfers, E. P.
1975 *Race Relations and Colonial Rule in Papua New Guinea*. Sydney: Australia and New Zeeland Book Company.
Wu, Chung-Tong
2003 New Middle-Class Chinese Settlers in Australia and the Spatial Transformation of Settlement in Sydney. In Laurence J. C. Ma and C. Cartier (eds.) *The Chinese Diaspora: Space, Place Mobility, and Identity*, pp. 359–378. Rowman & Littelfield Publishers.
Wu, David Y. H.
1982 *The Chinese in Papua New Guinea: 1880–1980*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
山下清海
2000 『チャイナタウン――世界に広がる華人ネットワーク』丸善ブックス。
2002 『東南アジア華人社会と中国僑郷――華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』古今書院。